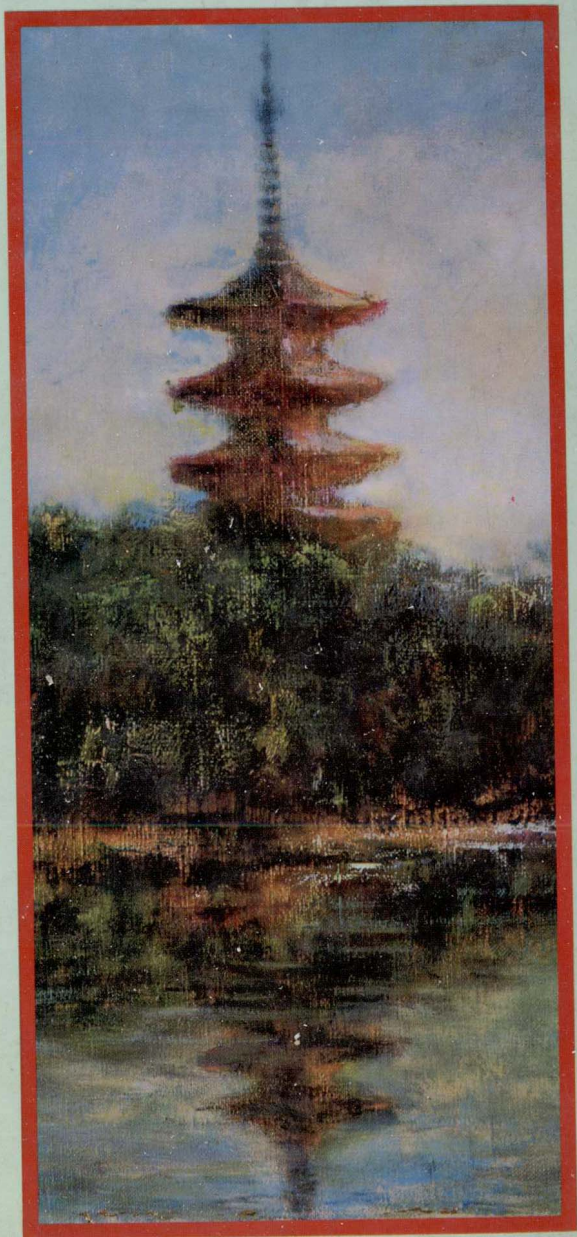


中西進編



柿本人麻呂

人と作品

桜楓社

中西 進編

柿本人麻呂 人と作品

桜楓社

柿本人麻呂 人と作品

平成元年 5 月 10 日 初版 1 刷発行
平成 3 年 4 月 1 日 初版 2 刷発行

編 者	中 西 進
発 行 者	坂 倉 良 一
印 刷	(株) デ ィ グ
製 本	松 栄 堂 製 本

発行所 株式会社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町 1-3-1
(郵便番号) 101 (振替) 東京6-18020
(電話番号) 03-3295-8771(営業)
03-3295-8774(編集)

検印は省略いたしました。 © S.N. 1989 Printed in Japan
造本には十分注意しておりますが落丁乱丁の際はおとりかえいたします。
ISBN4-273-02324-5 C0092

定価はカバーに表示してあります。

はじめに

文学は観賞

柿本人麻呂の歌には底の知れないものがある。どんなに考えてみても、味わってみても、まだ先に何かがありそうだという思いが残り、妙にやり切れない気持になるのは、私だけではない。

その理由は、人麻呂の歌がきわめて呪性にみちていて、多分に神話的だという点にあらう。通常の人間体験とは違った論理に貫かれた機制が、人麻呂の歌の中にはあるのではないか。しかしそれでいて、人麻呂は最新の知識も吸収したスケールの大きな歌人でもあった。何も古風な人間なのではない。あらゆる可能性をつくしながら、詩心の根源のところ到達しているゆえに、さまざまな側面を見せるのであらうか。

まさに人麻呂は偉大な歌人といっていいただろう。だから人々は人麻呂に大きな関心を抱く。しかし人麻呂は容易に人を寄せつけない。なぞの深淵を湛えて、人々の垣間見を拒否する。

そこで人麻呂のすべてが知られるような書物が要求されるのは、当然であろう。この書物はそんな要求にこたえ、人麻呂のなぞに挑戦するべき戦列を敷いてみようとして、作られたものである。われわれは人麻呂の生涯を、出生から青春時代、宮廷時代そして旅の人麻呂と区切って、それぞれの秀歌とともに語った。

さらに人麻呂特有の問題を提供する人麻呂の歌集を解説し、これに表記別を掲げてみるという試みをした。人麻呂の全歌をとりまとめたのも初めての試みだし、これに表記別を添えることも初めてではないかと自負している。口語訳をそえて利用しやすいよう工夫したので、広い読者にもしたしみやすく、人麻呂研究にも不可欠のテキストとなるはずである。

以上のような意図の達成に、志を同じくされた執筆者各位に厚く御礼申し上げたい。

一九八八年冬

編者

柿本人麻呂 人と作品

目次

はじめに

家系と出生

人麻呂の恋―生涯

人麻呂の恋―秀歌鑑賞

人麻呂と宮廷―生涯

人麻呂と宮廷―秀歌鑑賞

人麻呂と旅―生涯

人麻呂と旅―秀歌鑑賞

人麻呂の死

人麻呂と人麻呂歌集

人麻呂歌集―秀歌鑑賞

没後の人麻呂

橋本達雄 七

阿蘇瑞枝 元

島田修二 五

古橋信孝 六

篠弘 六

神堀忍 一〇七

岩田正 一八

渡瀬昌忠 一五

森淳司 一七

玉城徹 三二

中西進 三七

柿本人麻呂關係年譜

*

口訳付柿本人麻呂全歌集

人麻呂作歌

二六九

人麻呂歌集

三〇六

人麻呂歌索引

三六五

梶川 信行

二五九

坂本 信幸

二六七

犬飼 公之

家系と出生

一 はじめに

柿本人麻呂は長い和歌史上、常に第一等の歌人としての名声を博し続けて今に至っているが、その経歴についてはほとんどわかっていない。持統朝に最盛期を送ったことは万葉集の数々の作品によつてうかがわれるにしても、宮廷への出仕時期、所屬、職掌および死没の時代場所も、いずれもさだかでない。

このように残した作品のみが唯一の手がかりしか与えていない人物を全体的に理解するのはきわめて困難なことだが、その一助として、早く折口信夫が古代の人物伝を考えるに當つて注意を喚起していたように、^(注1)その属していた氏族についての知識を念頭において考えることが大切になってくる。また作品がいかなる条件下に作られているかを知ることがもちろん重要であるが、その上でそれが何歳の作かが明らかにできるならば、これまた作品理解の上に資するところは大きいと思われる。こうした観点から、以下その二点について述べてゆきたい。

二 家 系

柿本氏は昔、第三十代敏達天皇の代に家門に柿の木のあるところから称するようになったという。平安時代初期の『新撰姓氏録』によると、「大和国皇別」に、

柿本朝臣。大春日朝臣と同祖。天足彦国押人命の後なり。敏達天皇の御世、家の門に柿の樹有るに依りて、柿本臣といふ氏と為れり。

とある。これにより柿本氏の本拠は大和であろうことや祖先、同族も知られるが、敏達朝以前にいかなる氏を称していたのかは分からない。次に『古事記』を見ると、第五代孝昭天皇の条に、次のような系譜が記されている。

此の天皇、尾張連が祖、奥津余曾が妹、名は余曾多本毗売の命を娶りて生みたまへる御

子、天押帶日子の命。次に、(中略)、兄天押帶日子の命は、

氏略す……近つ淡海の国造が祖ぞ。
春日臣・大宅臣・栗田臣・小野臣・柿本臣・宮比事臣・大坂臣・阿那臣……(七

すなわち、孝昭天皇の第一皇子天押帶日子の命を祖先とし、春日臣以下十六氏の同族をもち、その五番目に柿本氏はあるのである。祖先の天押帶日子の命の名は、さきの新撰姓氏録の祖先の名と微妙な違いがあるが、同一人物と解される。そして春日臣以下多くの同族のあ

ったことも知られるが、依然として柿本を称する前の氏の名はわからない。ところが、この系譜と対応する『日本書紀』の孝昭紀を見ると、その六十八年春正月十四日の条に、

天足彦国押人の命は、此れ和珥臣等が始祖なり。

のようにある。ここには古事記に見えた多くの氏の名はなく、そこになかった和珥氏だけが見えるのである。これは古事記が一祖多氏、日本書紀が一祖一氏の形式で記す原則によるのだが、それにしても古事記に和珥氏の名のないのは不思議である。しかし、この疑問を明快に解き明かしたのが岸俊男氏であつた。^(注2) 岸氏はさきの孝昭記の同祖系譜がこの和珥氏のものであることをいい、その証として日本書紀に現われる複姓をあげている。それは雄略紀に「春日和珥臣」「春日小野臣」、孝徳紀に「春日栗田臣」とあることなどが、複姓一般の原則により、和珥、春日、小野、栗田などの氏が同族であるとし、さらに反正天皇の妃で古事記に「丸邇之許基登臣之女、都怒郎女」とある人が、書紀では「大宅臣祖木事之女、津野媛」となっている。春日以下小野までの四氏は孝昭記系譜の先頭集団をなす氏である。わが柿本氏はその次に出るが、これから考えてやはり和珥氏の同族で血縁関係があつたと思われるという。また、孝昭記に和珥氏の見えないことについても、和珥臣の称呼が継体・欽明朝ごろに消え、複姓が示すように和珥臣は春日臣と

改姓したので孝昭記系譜の筆頭に春日臣が出ているのではないかとし、書紀に和珥臣だけを記しているのは、時代的に和珥氏の最初の記載であるため、和珥氏と統一したのであらうとしている。そして和珥氏が春日氏へと改姓されたあとごろから、氏の血縁的分枝や従属地方豪族の同族化が盛んとなり、やがて大宅・柿本・櫟井いちひるや栗田・小野の諸氏がしだいに春日氏から独立化していったもので、その時期は新撰姓氏録が小野・柿本氏への改姓をとともに敏達朝と伝えるそのころでなかろうか、というのである。これらの考察はきわめて精細・周到なもので従つてよいと思われる。

すなわち柿本氏は和珥氏を祖とし、それが春日氏と改姓したあとに分枝した氏であつたといふことになる。

柿本氏が和珥氏の支族であるという見解は、孝昭記と孝昭紀の記事とを考え合わせて、はやく折口信夫や武田祐吉(注3)によつて述べられていた。しかし記紀の系譜を直結させるのは飛躍であるとする否定説も一部にあつたのであるが、岸氏の研究によつて確実視してよいことになつたのである。

では、和珥氏はどこを本拠とする豪族であつたのかといふと、書紀に出る「和珥坂」「和珥武録坂」たけすきのさか「和珥池」や古事記(応神)の歌謡に「櫟井いちひるの丸珥坂わにさ」(四二)などから、諸注が現

在の天理市和爾町（旧添上郡櫟本町大字和爾）と比定しているように、この地が本拠であったことは間違いない。そこは奈良盆地の東北部にあたり、東に春日、竜王と続く山系を背い、式内社和爾坐赤坂比古神社が鎮座し、すぐ南には全長約百四十メートルの前方後円墳東大寺山古墳があり、さらにその南に、同じく式内社和爾下神社があつて、祖神天押足彦命をまつている。

そして柿本氏の本拠も、やや小高い所にあるこの和爾下神社の西麓にあつたと比定できるのである。旧大和国添上郡櫟本、現在の天理市櫟本町であつて、和爾の集落を田んぼのかなたに望みうる近さである。

平安時代末の学僧顕昭の『人麻呂勘文』によると、添上郡石上寺のそばに春道の森があり、その中に柿本寺という人麻呂の堂があつて、その前の田の中に人麻呂の墓と称する小塚があつたという。その地は和爾下神社の参道に面し、人麻呂遊園地と称する広場があつて、人麻呂を顕彰する歌塚の碑が立ち、ゲートボールに興ずる老人たちの姿も見られる。またここは柿本寺の跡地といわれ、二三の礎石と奈良時代の瓦が出土している。人麻呂はおそらくこの地で生まれ、幼少時代を送つたことと思われる。

三 和珥氏

人麻呂は和珥氏の血脈を承けて成長した。ではこのあまり聞きなれぬ和珥氏とはいかなる豪族であったのか。それは歌人人麻呂を考える上で大きな意味をもつと考えられるので、次にふれておきたい。

和珥氏は五世紀から六世紀前半にかけて、大和朝廷において活躍した有力豪族として奈良盆地東北部一帯に強大な勢力を誇っていた。記紀によれば、仲哀天皇以前は信憑性に問題があるので除くが、応神・反正・雄略・仁賢・継体・欽明・敏達の七天皇に九人の后妃を入れ、生まれた皇女がまた后妃となる場合も多く、皇室なканずく後宮（内廷）に密着した豪族であった。またこれは詳しい調査を経なければ決定的なことは言えないが、さきの東大寺山古墳をはじめとし、和珥氏の勢力圏内にある平城京の北方に並ぶ佐紀盾列古墳群と呼ばれる大古墳群（神功皇后陵・成務天皇陵・日葉酸媛陵・平城天皇陵・コナベ古墳・ウワナベ古墳など）も、なんらかの意味で和珥氏にかかわるものであろうとされているのも、それにふさわしい豪族であったからである。

そして人麻呂にとってとくに注意をひくのは、すでに武田祐吉や渡瀬昌忠氏も言及してい